らかにしている。そして，「マレーシアのイスラム教がどこから，いつ，どうして来たのか」という基本的問題をテーマに，ジャワやマラヤの伝承説話，アラビア・インド・中国史料はじめ種々の史料を用い，Samudra 王 Malik aṣ-Ṣâlih や ジャワ東部 Leran で発見された Fâtimah の墓碑銘，1902年発見された Trengganu stone の碑文など写真で紹介し，読解，注釈して考察し，すでに発表された多くの論文を詳細に再検討して結論を得ている。

すなわち，イスラム以前から南海交易に従事していたアラブ人，ペルシャ人交易者は，878年頃からマレーシア沿岸にムスリムの町を建て定住したが，彼らと共に来たイスラム教はまだマレー人には受入れられなかった。実際にイスラム教がマレーシアに定着するのは13世紀で，特に13世紀後半以降，スーフィ（Sûfi）の宣教範囲にマレーシアが入ってから Bengal を拠点にムスリム交易者（アラブ人，ペルシャ人，インド人）やスーフィ布教者の大規模な改宗運動が行なわれてイスラム教が普及していったのであるとし，「どこから，いつ，どうして来たのか」という問いに，「Bengal から13世紀に，ムスリム交易者やスーフィ布教者によって」なる答を出している。そしてこの後，1414年，マラッカ国王がイスラムに改宗してから急速にイスラム教は普及し，一般化していった。1511年にマラッカ王国が崩壊してイスラム教普及の勢いも衰えるが，19世紀に入ってからは民族主義的意識に支えられ，勢力回復への試みがなされこれが成功してきたという。

この結論は格別新しくもなく問題もない。ただ本書でマレーシアの概念が一定せず，時としてはジャワ，スマトラを含めてマレーシアとしている点注意すべきである。史料の選択にももう少し配慮が必要と思えるが，著者が用いた豊富な資料とその巧みな配置により，各章がひとつずつ問題を解いてゆくような面白さがあり，興味深く読ませるようになっている。マレーシアにおける，あるいは東南アジアにおけるイスラム教の研究入門書として，また研究資料として十分利用出来うる書である。　（梅田　輝世）

Teiichi Kobayashi. *Geology and Palaeontology of Southeast Asia*. Vol. I. Tokyo : The University of Tokyo Press, 1964. 289p.

本書は東京大学名誉教授小林貞一博士の執筆になるもので，東南アジアの地質および古生物にかんする学術書である。

第1章の Geology of Thailand では，タイ国の地形・研究史・古生代の層序・中生代および新生代の地質系統・地史について詳述し参考文献をも列挙している。

第2章の Palaeontology of Thailand では，1916年から1962年の間において発表されたタイ国にかんする古生物学的研究のすべてを網羅し，Cambrian から Quaternary までの地層中から発見記載された化石の全部を紹介し，参考文献をも残らず示している。

第3章は Contribution to the Geology and Palaeontology of Southeast Asia で，内容は17節からなり，1963年から1964年にかけて，タイ国・マラヤおよびベトナムの地質および古生物について，著者をはじめとしその主宰する12名の学者の研究内容を包含しているもので，これらの諸国の最近の研究を総括し紹介している。

要するに，本書は，従来の幾多の研究および最近における著者ならびにその主宰する研究グループの研究結果に基づいて，東南アジアにおける regional geology および palaeontology にかんする最古から現代にいたるまでの知識を与え，また，関連分野の参考文献のすべてを示したもので，この方面の研究者にとっては必読を要する著書である。　（瀧本　清）

Withesakarani. *Yuk Thorarat*. Bangkok : Samnakphim Prachakhom. 1960, 744p.

本書は，全3冊よりなるタイ国現代政治史シリーズの第1冊目に相当する。本書の題は「暴君の時代」と訳せよう。このあとに Yuk Tamin（「暗黒の時代」）と Yuk Phadthanakan（「国家開発の時代」）の2冊が続く。

タイの中間層知識人の1932年革命以後の政治史にたいする関心にはなみなみならぬものがあるとみえて，現代政治史に関する出版は後を断たない。それらの本にはつまらないものもあるが，参考になるものも少なくない。本シリーズは，構想の規模において，また，

歴史にたいする一つの立場のとり方において，優に群書を圧倒している。とりわけ，本書のメリットは，全3冊で，1932年から現代（サリット政権）にかけての時期をカバーしようとする点で，他にあまり類書を見ない。

本書は，1912年の失敗した革命の記述にはじまり，1935年におけるラーマ7世の退位で終っている。従って，本書の主たるテーマは，1932年の立憲クーデターの政治過程を敍事的に記述することであるといえる。1932年の人民党革命の前史に，1912年の革命を据えたものは，あまり他に例がない。おおかたのタイ人は，両者を断絶させて考えるからだ。その他，本書には，いくつかの特色がある。1933年のルアン・プラディットによる民族経済計画案提出のいきさつに，異常にページを割いている。さらに，ラーマ7世退位事件についての記述もくわしい。これらを総合して考えると，筆者 Withesakarani（もちろん偽名）の立場は，貴族主義から民主主義への移行を歴史の理想と考え，その流路にそぐわないものには，Thorarat（暴君）のレッテルをはる立場である。筆者は，従って，1932年革命の意義を認めながらも，人民党の Khanathipatai（集団独裁）に抵抗して王位を退いたラーマ7世にたいしては，同情的である。この立場は，タイの中間層知識人にあまねく共通する考え方でもある。

本書は，タイのすべての本に見られる特色を備え，なまの資料をそのまま羅列する傾向をやはり脱し切れずにいる。それに加えてたとえば Thai Noi の本（「10人の総理大臣」）などと比べると，個々の政治家の性格にたいする関心が幾分稀薄で，部分的にはまったく面白みを欠く。そのほか，もし歴史的脈絡を重んずるならば当然触れるべき事柄がとばされているのが目立つ。人民党の形成過程についての説明が弱いし，革命直後の国王の心理，プラヤー・マノーパコーンの政治的性格についてのコメント，王党叛乱(1933年)の際のボワラデート親王の動機と当時の国王の心境，1933年のタイ国初の総選挙についての記述，などが落ちている。いずれも，重要な事柄なので，惜しまれる。こういう風に，歴史の内的連関性を実証的に読む努力が欠けるところに，タイのこうした歴史書一般の欠点がある。こうした非歴史的な思惟様式がタイに目立つのはなぜだろうか。

これらの欠点にもかかわらず，あえて本書を推すのは，やはり，一つの大部なシリーズで現代史をカバーしようとする雄大な構想が買えるからであり，同時に，特定個人の太鼓持ちが多い類書のなかで，やはり，一つの理念で敍述を貫いている点は馬鹿にできないからだ。本書に続く「暗黒の時代」ではピブーンが中心的に登場するが，そこでは，かなり動機還元法的手法がとられ，面白くなっている。本書が少しく図式的になったのは，対象として扱った時代の性格の反映なのかも知れない。

出版されたのは少し古いが，本書はいまでも入手できるので，後で発売された残る2書と共に推薦しておく。　（矢野　暢）

Fred W. Riggs. *Thailand—The Modernization of a Bureaucratic Polity*. Honolulu : East-West Center Press, 1966. x+470p.

本書は，一級の比較政治学者リッグス教授がものにした野心的なモノグラフである。リッグスは，従来は，もっぱら新興諸国政治についての理論づくりで知られていた。理論派の筆頭が，こうしたこのうえなく実証的なしかも大部なケースワークをなしうるのだから，その底力は怖るべきものである。

リッグスの従来の理論の核心は，移行社会（transitional society）という概念——かれはそれをプリズム的社会（prismatic society）とよぶ——であった。その意味で，リッグスの理論は，多かれ少なかれ，伝統社会から近代社会への移行という，歴史的展望を備えるのである。リッグスの一見観念的な理論は，その点で，きわめて現実的たりうる要因を秘めていたのだ。その点が，見事に示し出されたのが本書であろう。

タイ国政治の高度の研究としては，これまでウィルスンのものがあったが，ウィルスンは現代の統治構造の構造的分析に関心を寄せたのに反し，リッグスは，タイの統治構造の歴史的変遷に焦点を合わせた。敍述は，19世紀中期にはじまり現代にまで至る。そして，その構想は雄大である。

第1部は，タイの伝統的政体を扱い，第2部は，タイ国がたどった近代化の歴史的過程を扱う。ここらに展開される近代化の理論は，行政学的な立場からのものであれ，なかなか興味深く，特に，農林省のなかにデスクをもらって行なった，農林省の変遷の研究は，